

平成 26 年度 【 学園研究費助成金 < B > 】 研究成果報告書

学部名 人間関係学部

フリガナ スギトウ シゲノブ
氏名 杉藤 重信

研究期間 平成 26 年度

研究課題名 マオリ・サイエンスの研究：アイデンティティと危機をめぐって

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	杉藤 重信	人間関係学部	教授
研究分担者			
研究分担者			

1. 本研究開始の背景や目的等 (200 字～300 字程度で記述)

「マオリ・サイエンス」とは、現代に再構築されたマオリの世界観・自然観である。本研究は、マオリが「マオリ・サイエンス」をもちいてどのようにアイデンティティを維持し、彼らのおかれている危機を克服しようとしているのか、とくに、危機としてのクライストチャーチ地震の経験との関連で、「マオリ・サイエンス」の意義について明らかにしたい。

文化人類学では世界の民族の自然認識について従来フォークタクソノミーや認識人類学としてかれらの自然観の分析を行なってきたが、本研究では、マオリ・アイデンティティやマオリの教育観と関連づけを試みる。

2. 研究方法等 (300 字程度で記述)

2014 年 8 月にオークランド博物館の自然史セクションにおける「マオリ・サイエンス」による展示を調査。また、オタゴ大学のポール・タブセル教授（オークランド博物館のマオリ・展示の担当者のひとり）にインタビューを行った。また、クライストチャーチ近郊のラパキ・コミュニティのマオリ女性にクライストチャーチに関する地震観を尋ねた。

また、”Hostile Shore: Catastrophic Events in Prehistory New Zealand and their Impact on Maori Coastal Communities” (Bruce McFadgen, 2007, Auckland UP) を入手し、マオリが NZ に到着して以来の地震・津波・噴火の影響についての文献研究をおこなった。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

NZの地球科学的条件は日本のそれと類似していて、複雑なプレート境界における地震・津波・噴火による多大のインパクトを受けてきた。先住民のマオリはNZへの到達以来、約千年の歴史を持つが、NZにおけるそうした自然環境が彼らの神話・環境観に大きな影響をあたえていると考えられる。彼らは、もともと太平洋を西から東へと海を渡ってきた人々の子孫である。ハワイ・NZ・イースターへは、現在のタヒチ周辺のソサエティ諸島から約千年前に移動したが、彼らポリネシア文化に共通する神話・環境観にたいする影響も興味深い。比較研究の必要な分野と考えられる。

“Hostile Shore”の著者マクファゲンによると、考古学的なマオリの居住地の歴史の変遷には、歴史的な地球科学的カタストロフィのインパクトによると見られるものが多く見られるという。マオリに関する考古学研究に基づき、マオリが伝承する神話や環境観への反映についても更に検証する必要があると思われる。幸い報告者はこれまで、オークランド大学の考古学研究のハリー・アレン教授と長く情報交換を続けており、本年度は、オークランド沖のランギトト島の噴火を巡って情報交換することができたが、あわせて、連携研究の成果を期待することができるだろう。また、オタゴ大学のポール・タプセル教授とは、マオリ・アイデンティティとマオリの環境観について情報交換することができた。

今回の調査研究では短時間のインタビューしか行うことができなかったが、今後は、マオリの人々とのコネクションを更に強化して、本研究の今後の展開を期したい。

4. キーワード (本研究のキーワードを1以上8以内で記載)

①カタストロフィ	②自然認識	③民俗分類	④
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

本テーマに言及したものは、『椛山人間学研究』第10号(2014年)に、以下の二本を掲載予定。

- 1、「2.22、クライストチャーチで何が起こったか：3.11、東日本大震災との比較で」
- 2、「文化人類学研究ノート：多様性の視座に向けて」